

京大吉田寮にみる摩擦と共生がもたらす建築と自治の相互作用に関する研究

—個と集いの生活空間を通じた社会運動・文化活動への展開と現代的意義—

A Study on the Interaction Between Architecture and Self-Governance Brought About
by Friction and Coexistence as Seen in Kyoto University's Yoshida Dormitory

—The Development of Social Movements and Cultural Activities Through Living Spaces for Individuals
and Gatherings, and Their Contemporary Significance—

○原琴乃¹, 田所辰之助²

○Kotono Hara¹, Shinnosuke Tadokoro²

This paper researches the history of Kyoto University's Yoshida Dormitory, elucidating the relationship between its architecture, student autonomy, and culture. We believe the free dormitory space, which naturally fosters community, holds valuable insights for the modern era. Over its long history, Yoshida Dormitory has accumulated a powerful legacy born from repeated acts of free creation. We seek to explore the spiritual and architectural values dormitory residents hold for Yoshida Dormitory and present its significance in contemporary society. This abstract is divided into five parts, incorporating architectural drawings and a self-compiled chronology. The structure is as follows: Part 1) Research Purpose and Methodology, Part 2) Architectural Characteristics, Part 3) Student Autonomy and Cultural Activities, Part 4) Contemporary Significance, and Part 5) Bibliography.

1. 研究目的・研究方法

本編では、自治寮となっている京大吉田寮(以下、吉田寮と略す)の建築が及ぼす社会とのつながりやそこを生活空間として利用する学生の精神的価値を考察し、現代での存在意義について研究する。

近年は建築が個の集まりを誘導する傾向が大きくなっているのに対し、個はより確立されていることへの矛盾を感じている。吉田寮は自らが集うことを大切に考え、自分たちの自治内で空間を自由に変容させていく。この姿は現代が目指すコミュニティの在り方を考え直すきっかけになるのではないかと考えた。また生活の不便さを補い合いながら、学生自ら補強や修繕の積み重ねをしてきた吉田寮は、そこで過ごした人々の時間を建築自体に刻み、物理的には脆くありながらもどこか強さを感じるこの不合理さに魅力を感じる。ここ数年保存するのか解体するのかなどの議論が社会的にも話題となっていたが、どう残していくべきなのかも考察したいと考える。こうした背景から、吉田寮の歴史を追い、建築と学生自治の関係を明らかにし未来への結節点を見出すことを目的とする。

研究方法としては、過去の文献等から歴史年表をつくり、主に「自治」「文化」「木造建築の歴史的価値」を軸に分析を行う。また、同時代の他大学の学生寮との比較、歴代総長ごとのどのような教育思想の違いとそれによる学生や学生寮への影響があったか、可能であれば吉田寮に住む学生の声聞き学生目線の精神的価値も模索する。

2. 建築的特徴

京大寄宿舎自体は1897年から始まったが、吉田寮の現棟は1913年に竣工された。木造二階建て一部平屋建てであり、屋根は寄棟造、棧瓦葺き、外壁は下見板張りとなっている。学生寮としては日本最古の木造建築であり、2015年に建築史学会と日本建築学会近畿支部から建物の保存活用に関する要望書が大学に提出されているそうだ。東西約94m、南北約53mで、建築面積は約2000平米である。Figure 1を見てわかるように、中庭をはさみながら東西に長い三棟が均一に並び、西側の共有スペースが三棟をつなぐ。北西にある食堂は、1964年の火災で一部焼失し縮小されたものの現在も食事の場として利用されている。

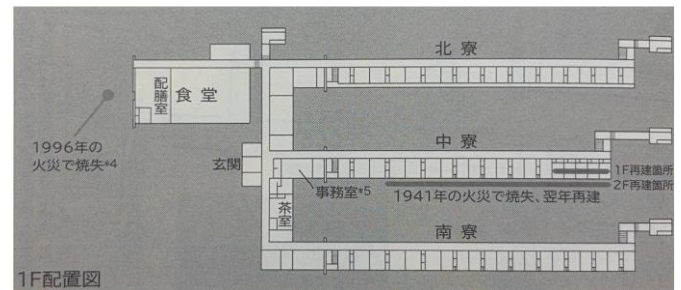


Figure 1: First-floor layout of Yoshida Dormitory in 2012, Quoted from p. 25 of [1]

全体を通して個室よりも共同空間の印象が強まる要因として考えられるのは、食事空間や水回りが共同利用となっていること、個室の部屋は小さく長時間とど

まる場としては適さず共有空間へと促されること、長屋型であることで廊下も半ば居間となり廊下を介した出会いを生むこと、談話室やホール空間は居住者のみならず外部の人とも交わる場として機能すること、などが挙げられる。また旧印刷室は月に数回開かれる総会の場として利用されるが、新入寮生の部屋割りが決まるまでの共同生活の部屋としても使用される。そこでの集団生活を気に入り、個室が割り当てられた後もこの共有スペースで寝泊まりをし続けるような人もいたようだ。一般的な寮とは違い、どれだけ集団生活に重きをおき自治を行おうとする姿勢があるのかが垣間見える。

下記の Table 1 は改修等の建築面に関する簡易年表を自作したものである。この年表を見ると食堂が多くの転換期に関わっていることが明らかになった。この寮の中心核といえる可能性を示唆している。三高寄宿舍での部材が吉田寮食堂にも使われていることから始まり、火災や補修など建築としての変化のきっかけとなっている。その理由として水場や火床であることも考えられるが、やはり人の生活に不可欠な食事の場でありそこへ多くの寮生や外部の人が集まって利用し食事をしていたことが最も理由と考える。空間の利用人数が多いほど、空間としての時を細かく重ね変化も多い。生活の場となればなおさらだろう。

Table 1: Simplified Chronology of Architectural Changes at Yoshida Dormitory

建築面の簡易年表	
(吉田寮の物理的変化・改修・施設設備)	
1889	三高寄宿舍の食堂建築→後の吉田寮食堂
1897	京都帝国大学創立に伴い、旧大学寄宿舍設立
1912-1913	旧大学寄宿舍の部材を再利用し、現在の吉田寮建設
戦後-1960年代	居住者増減とともに修繕を繰り返す
1964	火災で食堂一部焼失
1970年代-1990年代	老朽化が進行、寮生主体で補修することが増える
2011-2015	耐震性・老朽化問題が大学内部で議論を呼ぶ
	食堂に基礎交換、耐震壁の導入など大学側が補修実施
2015	新棟完成、吉田寮現棟と食堂に並ぶ三棟体制に
2017	大学側が吉田寮現棟を耐震不足で危険と判断し退去要請
2019	明渡訴訟提起、保存か解体かをめぐる建築論争へ発展
2025年8月	和解成立、吉田寮現棟の保存活用を前提に耐震工事の検討

3. 学生による自治と文化活動

「初代総長木下によって「自治をおこなう寄宿舍を教育機関として重視する」という方針が示された」([1]編集：京大吉田寮百年物語・発行者：原宏一、2025年7月25日、p.76)ことが、現代まで守られ続けてきた自治のはじまりだ。戦争前後、総長の入れ替わりなどで方針の変化や学生主体ではない自治に切り替わってしま

ような場面もあったが、学生はこの初代総長の考えを今も自治の起点としている。この学生主体の自治が求められるのは、吉田寮での生活は自然な日常の中で考える時間が与えられ、その後自らで選択とその責任が人生上での大きな学びになるのではないだろうか。実際に([1]編集：京大吉田寮百年物語・発行者：原宏一、2025年7月25日、p.406 論考8)の中に示された1960年に卒業した人物によると、「生活の自立と心の自律」を学び、今も大切にしているという。「自律性を保つためには強い意志と努力が必要だった」と語る。

またこの自治の中で開催される文化活動は、時には寮に住まない学生や大学外の人まで巻き込まれていく。文化活動も自治の延長線上にあり、内部の合意形成の実践が外部との交流や連携へと拡張する過程を示している。

4. 現代的意義

吉田寮は建築面では物理的な存続の危機、自治・文化面では制度による自治の危機、この二重構造の中で絶えず「揺れ動く場」であることがわかる。吉田寮以前の寄宿舍も自治が取れない寮は精神的価値がないと学生は判断し、のちに解体された。学生が思う精神的価値とはなにか、そして情報にありふれ物事が一人でも完結できるようになった現代で、吉田寮のように自発的に人が直接集う意味を見出し、コミュニティの在り方を再考する必要があると考える。

5. 参考文献

- [1] 編集：京大吉田寮百年物語・発行者：原宏一、「京大吉田寮百年物語. 現役最古の学生寮がたどった歴史と寮自治」, 合同会社小さき社, 2025年7月25日
- [2] 編集：実生社編集部・発行者：越道京子, 「究極の学び場 京大吉田寮」, 実生社, 2024年5月15日
- [3] 杉本恭子, 「京大的文化辞典」, フィルムアート社, 2020年6月25日
- [4] 写真：平林克己・文：宮西建礼, 岡田裕子, 「京大吉田寮」, 草思社, 2019年12月6日
- [5] 編考：三一書房編集部・発行者：竹村一, 「資料 戦後学生運動 1」, 三一書房, 1968年11月11日
- [6] 武井照夫, 「層としての学生運動—全学連創成期の思考と行動」, 星雲社, 2005年6月15日
- [7] 上坂冬子, 「教育の忘れもの—東京の学生寮・和敬塾」, 集英社, 2006年3月29日
- [8] 中川文人, 「ポスト学生運動史 法大黒ヘル編…1985~1994」, 彩流社, 2010年2月1日